宇管工

県央産技校生に実技指導

分水作業のコツを伝授

〈3/9 日工経〉

宇都宮市管工事業協同組合（和田均理事長）は8日、平出工業団地の管工事会館で県立県央産業技術専門校の建築設備科の1～2年生20人を対象に「サドル付き分水栓の取り付け工事の講義と実技指導」を開催した。企業の技術者が生徒へ技術を伝授し、就業意欲の向上と人材育成につなげるのが狙い。宇管工は青年部会（福富昭部会長）が実技指導を担当した。県央産技校への技術指導は初の試み。

生徒らは口径100㎜の鋳鉄管に分水栓を取り付けた

和田理事長

和田理事長は「建設業界は人材不足が顕在化し、将来の担い手確保育成が喫緊の課題。産技校から分水工事技術指導の依頼があり、若手技能者育成になるなら」と快諾した。「1人でも多くの人が業界に興味を持ち、就職してもらえるよう産学が協力したい」とあいさつ。

黒川平教育技術委員会委員長は「水道本管は人間に例えるならば血管であり、本管が詰まると水道は機能不全に陥る。我々は水道のお医者さん的な立場であり、そのことを頭の片隅に入れて作業すると面白い。半日頑張ってほしい」と激励した。

西浦徹青年部会副部会長が座学の講師を務め、水道本管から各家庭に分岐するバルブの取り扱い方法を説明。宇都宮の水道は106年前に通水を開始。市水道は法令の51項目より多い71項目の水質検査を経て50万都市に安全安心な水を供給していると訴えた。

敷地内に口径100㎜、延長4㍍の鋳鉄管2本が組まれ、生徒が2人1組で分水管の取り付け、穿孔、通水作業の実技を体験。古沢和夫助教授は「高い技術力に間近に接することができ、設備業に就職する生徒たちが将来像を描くのにとても参考になる」と話す。

今春に設備業へ就職する青木優人さん（20）は「家業が設備業なので建設業には自然に興味を持った。人に頼られ、お客様に分かりやすい説明ができる職人になりたい。丁寧に教えてもらい、初めてながらスムーズに仕上がった」と感想を述べた。